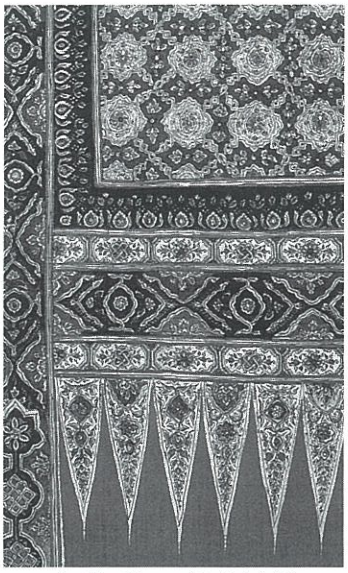
# 文化学園服飾博物館だより

第13号 2000.4.1

1 掻 取　明治時代

2 ドレス　C．ディオール



3 掛 布　インドネシア

## ◇'99年度新収資料について◇

'99年度の主な収集品を地域別に紹介します。

＜日本＞は、男性の服飾を多く集めることができました。江戸時代の武士の鎧直垂（ひたたれ）や鎧下、陣羽織、明治時代の火事装束や昭和初期のモダンな図柄の襦袢などです。女性では明治時代に宮中で女官が着用した掻取（かいどり）（写真１）は独特の模様や刺繍が表れた優品です。また鹿鳴館時代のケープ、コルセット、パラソル、扇などを収集しました。

＜西洋＞では、エンパイア、ロマンティック、クリノリンといった19世紀の衣装の他に、1950年代から60年代のドレス（写真２）など現代の衣装にも重点をおきました。＜アジア・その他の地域＞では収蔵品の少ない中央アジアやアフリカの資料の他、インドネシア、ミャンマーの染織の充実を図りました（写真３）。また、'99年11月に開催した「母の手 ── 糸と針の仕事」展に合わせて、各国の裁縫道具の収集にも努めました。

服飾博物館がある遠藤記念館には、昨年の５月には新図書館、７月にはファッションリソースセンターがオープンしました。これらの施設と合わせた情報拠点としての博物館の役割を踏まえ、収集品を展示に生かしていきたいと考えています。

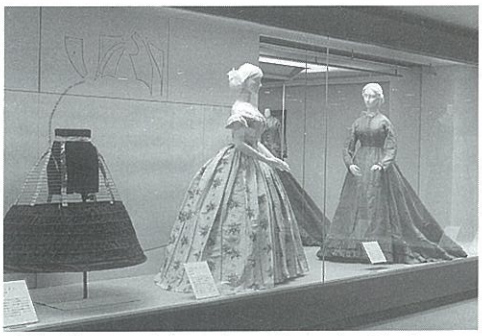
# '99年度活動報告

## ◇展　　示◇

**【西洋の服飾　── シルエットと構成 ──】**

**4月5日～5月28日**

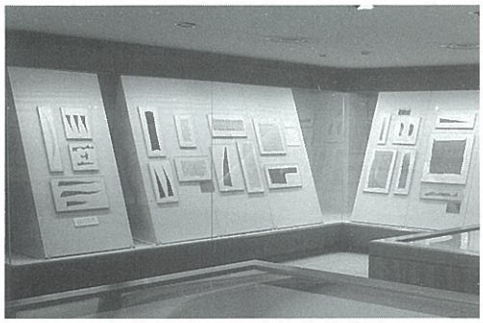
18世紀から現代に至る約200年間の西洋服飾の流れを女性の装いを中心に展示し、今回はドレスのシルエットを形作るファウンデーションやカッティングに着目しました。各時代のファウンデーションには、その時々の流行にしたがったシルエットを作り出すための努力や苦労がうかがわれ、ドレスの裁断図には生地の分量の多さや高度な技術などを見ることができ、着装だけで分からない発見や驚きがありました。



クリノリン・スタイルのドレスとファウンデーション

**【阿弥陀仏内納入染織品と朝鮮朝の装身具　── 韓国の精神文化と造形表現 ──】**　**6月18日～7月30日**

韓国との文化交流の一環として、温陽民俗博物館と茗園文化財団の協力により開催されました。1302年に造成された阿弥陀仏の腹蔵物として納められた染織品は衣服の半身なども含まれ、高麗時代の染織の技術や服飾文化を探る貴重な資料であり、朝鮮朝期のノリゲ(下げ飾り)、簪(かんざし)、指輪などの装身具は、韓国の優れた造形感覚を知るよい機会となりました。また、韓国の専門家による仏内納入染織品についての記念講演会を行ないました。



阿弥陀仏内納入染織品

**【友禅　東京派50年の軌跡　── 中村勝馬・山田貢・田島比呂子・中村光哉 ──】**　**10月9日～11月4日**

戦中から戦後にかけて中村勝馬氏が提唱した、友禅を芸術としてとらえようとする理念にもとずいて制作された4作家の作品を展示しました。重要無形文化財保持者（人間国宝）の作品が多数出品され、優れた意匠力や高度の技術が発揮された格調高い作品を紹介することができました。また、シンポジウムも開催され、友禅のあり方について活発な意見交換がなされました。

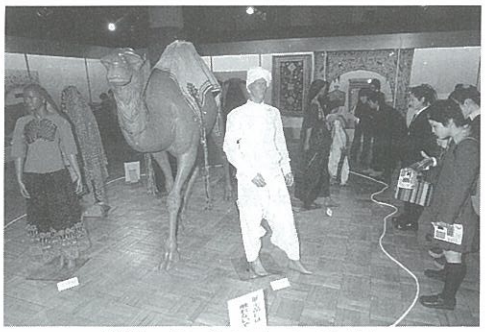
オープニングのテープカット

**【母の手 ── 糸と針の仕事】**　**11月25日～2月10日**

本展は季刊『銀花』の創刊30周年を記念した特別展で、家庭のなかで限られた材料を用い、母が生み出す素朴で愛情あふれる作品の数々をアジア各地から集め、紹介しました。展示は刺し子、百接ぎ(はぎ)(パッチワーク)、子供の健やかな成長を願うお守り類、針道具、現代作家の作品、『銀花』読者の作品など、充実した内容となりました。多くの方々の協力を得て、いつもの博物館とはひと味違った新鮮な雰囲気となり、来館者も自分自身の母の姿を思い浮かべながら感慨深く見学しているようでした。

インドの刺し子

## ◇館外展示◇


「遊牧の民に魅せられて」青森展

'97年９月から11月にかけて服飾博物館で開催し、好評をいただいた「遊牧の民に魅せられて」展を、青森と秋田で紹介することができました。青森展（５月21日～６月３日）は東奥日報社、秋田展（９月23日～10月３日）は秋田魁新報社との共催で、それぞれ連載記事やテレビ取材を組むなど広報活動が行き届き、短い会期ながらたくさんの方が会場を訪れました。

雪深い東北の地で、刺し子などの忍耐強い手仕事の文化を育んできた女性たちと、遊牧の生活にあって限られた材料と過酷な環境のもと、様々な染織品を生み出す女性たちの精神には呼応するものがあります。家族や生活を共にする家畜へのいつくしみ、自然への畏敬や感謝を針や機に込めて生み出された染織品が多数展示され、優れた文様や豊かな色彩に多くの方々から共感の声が寄せられました。

## ◇展示協力◇

「パリ・モードの舞台裏」展

「雲南省少数民族服飾展」

Bunkamura ザ・ミュージアムで開催の「パリ・モードの舞台裏」展（４月30日～６月６日）と、日中友好会館で開催の「雲南省少数民族服飾展」（10月28日～11月３日）に、当館学芸員と文化女子大学学芸員課程履修生が協力しました。

「パリ・モードの舞台裏」展ではフランス人空間演出家ジャン・オッド氏の指示のもと、華やかなパリ・モードを支える織物、刺繍、羽根細工や宝石細工など実に14もの工房を斬新な空間演出によって再現し、フランスの職人たちの世界に触れることができました。

「雲南省少数民族服飾展」は雲南省大衆芸術館の所蔵する、雲南省に住む25の少数民族の衣装を紹介するもので、形態も着装方法も多彩です。装身具まで揃えると多いものでは20ピース以上にも及ぶ複雑な組み合わせもあり、少ない参考写真をもとに、スカートの巻き方や、帯を結ぶ位置など考え、限られた時間と戦いながら丁寧に仕上げました。

## ◇講演会の開催◇

髪形の説明

11月13日、韓国の中央大学校にて開催された韓国衣類学会において、西洋の歴史的髪形とその製作について当館の大橋学芸員が講演を行いました。

これは、昨年韓国の温陽民俗博物館で開催された「西洋服飾の流れ」展のなかで、当館で独自に開発した薄紙を用いたマネキンの髪形に関心が集まり、今回の発表につながりました。時代ごとの髪形の流行、展示での応用などについてレクチャーの後、グループに分かれて実際にマネキンに髪形を作っていきました。皆、熱心に取り組み、様々な髪形に挑戦しました。

# ’00年度展示案内

**【文化女子大学開学50周年記念特別展　西洋服飾にみるTime, Place, Occasion】　4月5日～5月26日**

私たちは服を着用する際、時間、場所、目的などに応じ、その場面にあった服を選び、装い方を考えます。展示では18世紀から現代までの約200年間の西洋服飾の歴史を追いながら、Time(時)、Place(場所)、Occasion（場合）が表れた装いを紹介します。ロココ時代の宮廷での舞踏会の装い、19世紀から20世紀前半に見られる部屋着、散歩服、訪問服、夜会服、1840年頃から1920年頃の婚礼衣装、1950年代のイヴニング・ドレスなど、主に上流階級の女性の装いを中心に構成します。

**【アフリカの染織】　6月21日～9月6日**

近年、西欧文明の価値観におかされない独自の美意識と創造性によって、おおらかな魅力を放つアフリカの染織が注目を集めています。服飾博物館でも数年前から少しずつ収集を進めていますが、今回はその中からナイジェリア、チュニジアのものを中心に紹介します。原初的ともいえる染めや織りの技法から生み出される現代性をそなえた豊かな布の表情から得るものは多いことでしょう。

**【館蔵名品展　公家・武家・町家の伝統服飾】**(仮題)　**9月27日～11月4日**

館蔵の日本関係資料の名品を展示します。公家・武家・町家から構成し、それぞれの階層の服飾、染織の特質を探ります。江戸時代末の久邇宮家の装束、大正・昭和の即位式の装束、鍋島家の陣羽織、蜂須賀家の火事羽織や鎧下、江戸時代後期の三井家旧蔵の小袖などを紹介します。

**【アジアの生活文化をたどる　土の民族造形】　11月25日～’01年1月31日**

アジアの民族が長い年月をかけて培ってきた伝統や精神世界を、生活と密接に結び付いて生み出されてきた土器を主とした土の造形を通じて探ります。本展ではアジア民族造形文化研究所のコレクションを中心に、主にミャンマー、タイ、インドネシアなどを取り上げます。

**【雛と調度】　2月20日～3月14日**

毛利家に伝来した江戸時代後期の雛人形と雛道具を展示します。また雛道具にちなみ、書棚・文箱・化粧道具など実際に使用された調度品も紹介します。

＊以上の予定は都合により変更されることがあります

文化学園服飾博物館だより　第13号

編集・発行　文化学園服飾博物館
〒151-8521 東京都渋谷区代々木3-22-1
TEL. 03-3299-2387
Home Page：　http://www.bunka.ac.jp

学校法人文化学園：文化女子大学・文化服装学院・文化外国語専門学校・文化出版局・文化学園服飾博物館